



外来語の使用と理解(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐村, 雅彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004767

外来語の使用と理解（1）

桐 村 雅 彦

序 論

我々は毎日の生活において、数多くの言葉を、聞いたり見たり、あるいは読んだり話したりして使っている。このような言葉の使用において必要とされる能力の1つは、その言葉を的確に理解し、適切かつ効果的に表現する能力である。この能力は、家庭を始めとし、学校や社会などの生活において習得（獲得）されていく。だがこの習得された能力が十分に発揮されるためには、使われる言葉そのものについての知識が必要である。この言葉に関しての知識を、心の中に作り上げた辞書と考えると、この知識についての問題は、語の群がりや集まりとしての「語彙 (vocabulary)」の意味 (meaning) や量 (size) や獲得 (acquisition) などの問題としてとらえ直すことができる。中でも、語の意味 (語義) の問題は、語彙教育に係わる重要な問題であると言える。普通、語にはだれもが認めるような定義的な語義があることを知っているが、時に我々は、言葉を使っている人たちの間に「意味のずれ」が起こっていること、換言すれば、語義意識に個人差があることに気づくことがある。例えば、“めし” “ごはん” “ライス” や “落花生” “南京豆” “ピーナッツ” などにみられる言葉の違いを、我々はどれほど意識しているのだろうか。

言葉の定義や意味の問題は、言葉と物、すなわち語と指示対象 (referent) との関係の問題であり、概念の問題でもある。自然な状態で外界の事物や事象の名前を覚えること (語彙の獲得) は、対象となるそのものとの個別的で特殊

な経験の内容（すなわちそのものの視覚的、聴覚的、あるいは触覚的などの諸特徴）を、音声や文字で示された名称と連合させる体験を持つことである。それゆえ概念（concept）とは、この獲得された名称を通して想起される意味としての特定の経験や意識であると言える。それがより一般化された概念と成るには、同時にそして一定の事柄について多くの人々が共通した意味を分かちあう必要がある。先に述べた語義意識の個人差の問題は、一般化された概念にも関わっているが、それよりもむしろ個人の特定の経験や意識に根差している部分が多いと思われる。日本語について考えてみるならば、中心語彙ともいえる様々な表現において用いられる語彙は、学校などの言語教育の場において優先的かつ系統的に教えられている。そこでこの中心語彙（代表的なものとして基礎語彙や基本語彙や基幹語彙がある：語彙の研究と教育（上））には、語義の個人差は少なく、むしろこれ以外の周縁語彙において個人差が多いのだろう。特に周縁語彙の中でも、時として川の“氾濫”に例えられる外来語は、系統的で確実な習得の機会をさほど持たないが故に、語彙意識に個人差のある代表的な語彙であるのかもしれない。

現代の日本語の語彙は、和語・漢語・外来語・混種語によって構成されている。和語や漢語と区別のつかなくなったポルトガル語からの「煙草 (tabaco)」や「天ぷら (tempuro)」などや、オランダ語からの「ガラス (glas)」や「コップ (kop)」などを始めとして、明治以後に西欧諸国語から入ってきた多くの外来語は、すっかり日本語の語彙として定着している。しかし今日、ファッション・科学技術・芸術・流通産業などの分野を中心として、外国語をそのままカタカナ書きした語や和製英語、それに外国語の略語などの外来語が増加する傾向にあることは言うまでも無いことである。このような日本語の語彙として未定着な言葉（外来語）は、それらを見聞きする人達にとって十分に理解されているのだろうか。語義に通じることなく、ただなんとなく分かったつもりになって使っているということはないのであろうか。特定の和語や漢語の意味に

ついて、ある人がどの程度理解して使っているのかを調べるのは、かなり難しいといえる。その点、被験者の意識的な抵抗感も少なく、調べ易いのが外来語であるのかもしれない。

語彙の意味や意味関係に係わる言語心理学の多くの研究は、語彙項目の意味を、同じ領域内にあるその項目と別の項目との意味関係や連想によって考えてきた。Deese (1965) は、項目間の連想語データを因子分析することによって意味の問題に接近しようとした。また Miller (1967, 1969) は、被験者に単語の意味の類似性に基づいてカテゴリーに分類させ、この分類頻度を近接性のデータとして分析し、階層的なクラスター構造を抽出している。さらに Fillenbaum & Rapoport (1971) は、単語間の意味関係を構造的にとらえる技法として、線形グラフ法やクラスター分析を含む多次元尺度を導入した。方法論的な多様性として異なった分析法を用いたとしても、得られた結果が同じであるならば、その結果としての意味(意味論的)構造は非常に説得力を持ったものであるといえよう。桐村(1984)は、記憶における体制化を構造的に分析するに当たって、クラスター分析や MDSCAL の多次元尺度による分析法を適用してきた。本論文においても、外来語の意味(語義)がどの程度理解されているのかを調べるために、この分析法を用いることにした。

目 的

本論文では、2つの実験によって、外来語の意味が理解されて使われているかどうかを調べる。第1実験では、中心語彙が外来語によって占められている文章を和語や漢語を中心にした文章に書き換えさせる群と、逆に和語と漢語が中心の文章をできるだけ多くの外来語を含む文章に置き換えさせる群とを用いて、外来語の利用においてその意味が理解されているかどうかを調べる。第2実験では、外来語とその訳語の項目リストに意味関係の有無の評定を行ない、それを多次元尺度法で分析することにより、意味構造の上で外来語が理解され

ているか否かを検討する。

実験 1

目的

女子短大生に文章を読ませ、その文章を書き換えさせる時、書き換える対象となった外来語の意味をどの程度正しく把握し、使用しているのか調べる。

方法

調査の材料として用いた外来語とその訳語は、以下に示す2つの文章（深尾, 1979）の中から選んだものである。分析対象としての外来語と訳語の数は、それぞれ10語ずつである。外来語で表現された文章（「外来語→訳語」群）に使用は、『春から夏へかけてのパリモードは、ビビッドなクリアー・グリーンと、フレッシュでキュートなシンプルさが特徴です。生地はウールで、カラーはブラウン。カフスにフリルをつけ、ひじまでのロングの手袋をはめるか、ショートの手袋をはめる場合は、太いプレスレットをつけます。スカートは前にプリーツを二本。ベレーはレザー製です。』であり、下線の引かれた外来語が対象語である。これとは逆に、訳語で表現された文章（「訳語→外来語」群）とそこでの対象語は、『春から夏へかけてのパリモードは、はっきりとした純粋な緑と、若々しく愛らしい単純さが特徴です。布地は、茶色の毛織物で、袖口に飾りをつけて、ひじまでくる長い手袋をはめるか、または普通の手袋をして、袖口に太い腕輪をします。スカートには、前部にひだを二本寄せ、皮のベレーを被ります。』である。これらの外来語の文章と訳語（パリモード、スカート、ベレーは外来語のまま）の文章は、B4 の用紙に原稿用紙の升目と共に印刷した。

まず、「外来語→訳語」群の被験者には外来語文を、「訳語→外来語」群の被験者には訳語文を配布した。そして配布された文章をよく読ませた上で、

「外来語→訳語」群には文章内で使われている外来語を出来る限り訳語に換え、また「訳語→外来語」群には出来るだけ外来語を多用した今様な(ナウい)文章に換えて、升目に記入させた。この書き換え作業は、約20分であった。その後すべての被験者に対して、外来語とそれの訳語の10対を印刷した用紙を配布し、被験者自身がどちらの言葉を日常の会話や文章の中でよく使うのかを判断させ、よく使うと思った方の言葉に丸をつけて選択させた。被験者は大阪市内の女子短大生で、「外来語→訳語」群が62名と「訳語→外来語」群が77名とであった。なお、外来語と訳語の使用傾向についての選択判断を、同様の方法で大阪府立大の学生40名(男22名, 女18名)にも行った。

結 果

まずはじめに、対象語として選んだ外来語と訳語の各組み合わせにおいて、どちらの語をよく使うかの選択判断の結果を外来語選択率でみると、全体として、

表1 短大生と大学生の対象項目別の外来語選択者率

被 験 者		短 大 生 (62名)	短 大 生 (77名)	大 学 生 (40名)	全 体 (186名)
実 験 群		外 来 語 ↓ 訳 語	訳 語 ↓ 外 来 語		
対 象 項 目	ビ ビ ッ ド	1.6	2.4	2.5	2.2
	フ レ ッ シ ュ	60.3	53.0	70.0	59.1
	キ ュ ー ト	15.9	8.4	5.0	10.2
	シ ン プ ル	60.3	56.6	57.5	58.1
	ウ ー ル	93.7	84.3	87.5	88.2
	カ フ ス	6.3	7.2	25.0	10.8
	フ リ ル	95.2	91.6	77.5	89.8
	ブ レ ス レ ッ ト	96.8	98.8	87.5	95.7
	プ リ ー ツ	85.7	84.3	40.0	75.3
	レ ザ ー	11.1	10.8	27.5	14.5
平 均		52.7	49.7	48.0	50.4

表2 「外来語→訳語」群の対象10項目とそれ以外の外来語項目に対する訳語化での反応様式による分類（値は%）

対象項目	反 応 様 式				(選択者率)
	適訳語化	外来語のまま	誤訳化	省略	
ビビッド	27.4	30.6	27.5	14.5	1.6
フレッシュ	96.8	0.0	3.2	0.0	60.3
キュート	56.6	8.1	27.3	8.1	15.6
シンプル	43.5	11.3	35.5	9.7	60.3
ウール	41.9	38.7	17.8	1.6	93.7
カフス	58.1	14.5	27.4	0.0	6.3
フリル	43.5	50.0	6.5	0.0	95.2
ブレスレット	71.0	22.6	6.4	0.0	96.8
ブリーツ	77.4	17.7	4.9	0.0	85.7
レザー	37.1	51.6	11.3	0.0	11.1
モード	41.9	14.5	42.0	1.6	
クリアー	37.1	16.1	40.3	6.5	
グリーン	87.1	12.9	0.0	0.0	
カラー	98.4	0.0	1.6	0.0	
ブラウン	90.3	4.8	4.9	0.0	
ロング	98.4	1.6	0.0	0.0	
ショート	100.0	0.0	0.0	0.0	
スカート	3.2	96.8	0.0	0.0	
ベレー	72.6	25.8	1.6	0.0	

女子短大生の場合は「外来語→訳語」群が52.7%（標準偏差38.1）と「訳語→外来語」群が49.7%（37.3）であり、大学生の群では48.0%（30.8）であった。この外来語選択率を各外来語別に示したのが表1である。これら3群間の相関係数をこの外来語選択率によって求めたところ、「外来語→訳語」群と「訳語→外来語」群には0.9951、「外来語→訳語」群と「大学生」群には0.8882、「訳語→外来語」群と「大学生」群には0.8802を得た。これらの高い相関は、外来語の使用（選択）傾向が女子短大生と大学生との間において差がないことを示している。そこで3群全体を平均した選択率をみると、外来語でよく使う

項目（プレスレット，フリル，ウール，プリーツ）と，外来語と訳語が半々の項目（フレッシュか若々しい，シンプルか単純）と，訳語の方でよく使う項目（皮，袖口，愛らしい，はっきりとした）とに分れることがわかる。

次に，外来語を含む文を訳語化した被験者62名について，対象語である10項目とその他の外来語についての書き換え反応を，4通りの様式によって分類したのが表2である。適訳語化は，前もって外来語辞典や英和辞書によって基本的な訳語の基準を作成し，被験者の記述反応語がそれらに合致するか否かで判断し得点化したものである。外来語のままの得点は，訳語化せずにそのまま文章の中で用いた場合である。誤訳化とは，適訳語化に含まれない訳語を書き入れた場合である。そして省略とは，被験者が文章のなかに全く該当する訳語等を記入していない場合である。

このようにして分類された表2の結果を分りやすくするために，外来語選択に用いた10個の対象項目だけについて，4つの反応様式に選択者率を加えた5つの変数でパイプロット (Gabriel, 1971) による分析を行った。その結果が図1である。この図には，対象項目10個の布置のみでなく，各変数別に比較的高得点の項目を選んで囲んである。外来語選択者率の高い項目の中において，フレッシュとプリーツとプレスレットは的確に訳語化されており，またウールとフリルは外来語のまま使われる傾向にある。ところがシンプルは，かなり誤訳化や省略がなされやすい項目であるようだ。同様に，適訳語化がかなりなされた項目の中では，キュートとカフスが誤訳化の割合の高い項目であった。さらに外来語のままで使わ

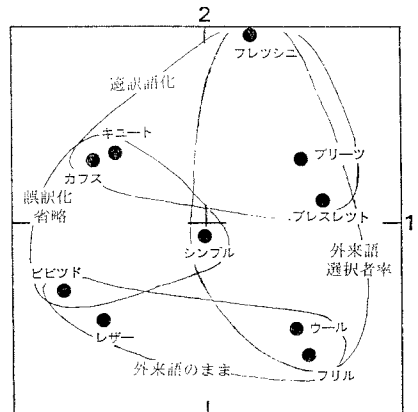


図1 パイプロットによる外来語10項目の分類

れる傾向にある項目の中でビビッドは、省略や誤訳化がかなり強かった。レザーは外来語選択者率が低いにもかかわらず、文中では外来語のまま使われる傾向にあった。

これらの結果は、まず被験者の外来語を使用するという意識（選択者率）があっても、具体的な書き換え作業のような場面では、訳語化のできるものと、外来語のまま済ましてしまうものとに別れる。また日頃の使用において、外来語よりも訳語（この場合は、和語や漢語としての日本語）でよく使うとされた項目が、外来語で示されて訳語化が求められると、かなり誤訳化や省略がなされる状況にあるといえる。これは、外来語の使用者においてその意味が十分に理解されていない事を示しているのかもしれない。

表2のモードからベレーまでの9項目についての大雑把な特徴として、まず適訳語化の高得点は色に係わるグリーン、カラー、ブラウン、長さのショートとロング、そしてベレーの6語である。これらの6語は誤訳化等も少なく、かなりよく理解されて用いられているといえよう。それに対して、スカートのように置き換え可能な訳語のない具体名詞（婦人用西洋袴などとは訳しづらい）は、外来語そのものをそのまま用いざるを得ないのであろう。誤訳化が他の項目に比して際立って高いモードとクリアーは、文章の中でこれらの外来語が用いられている時には、前後の文脈などから、それなりに理解したつもりではあるものの、はっきりと訳語化を求められると的確な訳語に書き直せなかった項目であるといえる。この誤訳化されやすい外来語についての分析は、今後も調査を重ねて詳しく分析される必要があるだろう。

表2の結果をさらに細く分析を行ってみると、外来語と訳語のいずれをよく使うのかの選択（外来語選択）と、適訳語化や外来語のまま等の反応様式との関係を調べることができる。表3は、外来語選択者率の比較的高い5つの項目について、4つの反応様式による得点を、外来語を選択した被験者と訳語を選択した被験者のグループ別に分けたものである。個々の項目について検討を加

表3 「外来語→訳語」群の5項目における〈外来語・訳語〉選択者別の反応様式の種類(値は%)

対象項目	選択語(人数)	反 応 様 式			
		適 訳 語 化	外来語のまま	誤 訳 化	省 略
フレッシュ	外来語(32人)	100.0	0.0	0.0	0.0
	訳 語(30人)	93.3	0.0	6.7	0.0
シンプル	外来語(37人)	56.8	5.4	29.7	8.1
	訳 語(25人)	32.0	20.0	36.0	12.0
ウール	外来語(58人)	43.1	37.9	17.2	1.8
	訳 語(4人)	25.0	50.0	25.0	0.0
フリル	外来語(59人)	45.7	47.5	6.8	0.0
	訳 語(3人)	100.0	0.0	0.0	0.0
ブリーツ	外来語(53人)	73.5	20.8	5.7	0.0
	訳 語(9人)	100.0	0.0	0.0	0.0

えてみると、まずフレッシュ(若々しい)は外来語か訳語のいずれを選択するにしてもほぼ間違いなく訳語化されている。シンプルについては、外来語を選んだ被験者の半数が的確に訳語化が来ているのに対して、訳語を選んだ被験者は $\frac{1}{3}$ しか訳語化が出来ず、外来語のままにすます者が多かった。またシンプルはどちらの選択者にとっても、誤訳や省略をしやすい語であるようだ。他の3項目は語訳を選択する者の少なかった語ではあるが、ウールはどちらの選択者であれ外来語のままにしておくことが多く、誤訳を起こしやすい語であるといえる。残るフリルとブリーツは共にほぼ似た傾向にあり、圧倒的に外来語選択者が多く、ほどほどに適訳語化と外来語のままとを行っており、それに対して少数の訳語選択者は全員が適訳語化を行っていた。

一方、外来語を極力含まない(訳語)文を出来るだけ外来語を使った文に書き換えさせた「訳語→外来語」群の被験者77名について、対象語である10項目とその他の訳語に関して、4通りの反応様式によって分類したのが表4である。

表4 「訳語→外来語」群の対象10項目とそれ以外の訳語項目に対する外来語化での反応様式による分類(値は%)

対象項目	反 応 様 式				(外来語選 択者率)
	適外来語化	最多外来語化	他の外来語化	無 答	
はっきりとした	0.0(ビビッド)	2.6(シャープ)	0.0	97.4	2.4
若々しい	3.9(フレッシュ)	46.8(ヤング)	2.5	46.8	53.0
愛らしい	7.8(キュート)	9.1(プリティ)	7.8	75.3	8.4
単純さ	15.6(シンプル)	1.3(アクティブ)	0.0	83.1	56.6
毛織物	15.6(ウール)	3.9(ニット)	6.5	74.0	84.3
袖口	1.3(カフス)	1.3(グリップ)	0.0	97.4	7.2
飾り	11.7(フリル)	27.3(アクセサリー)	12.9	48.1	91.6
腕輪	89.6(プレスレット)	2.6(リング)	1.3	6.5	98.8
ひだ	45.5(プリーツ)	13.0(タック)	19.4	22.1	84.3
皮	2.6(レザー)	0.0(—)	0.0	97.4	10.8
春	20.8(スプリング)	0.0(—)	0.0	79.2	
夏	22.1(サマー)	0.0(—)	0.0	77.9	
緑	92.2(グリーン)	0.0(—)	0.0	7.8	
茶色	79.2(ブラウン)	1.3(—)	0.0	19.5	
長い	36.4(ロング)	0.0(—)	0.0	63.6	
普通	3.9(ショート)	7.8(ノーマル)	2.6	85.7	

分類内容は、該当する外来語に置き換えた適外来語化、その他の外来語の中で最も多くの書き換えが見られた最多外来語化、残りの外来語の占める率としての他の外来語化、それに外来語化を試みなかった無答である。「外来語→訳語」群と同様に、10個の対象項目について4つの反応様式に外来語選択者率を加えた5変数でバイプロットを施した結果が図2である。図1にならぬ変数別に各項目を囲んでみた。外来語選択者率の高い6つの項目の内、腕輪とひだは的確に外来語化(適外来語化)されているとみなせよう。ただし、ひだは飾りと共に他の外来語化がされやすい語でもある。そして若々しいと飾りは、文章での表現(訳語の用い方)上の問題から、別の外来語をより多く用いている(最多外来語化)。このように、適外来語化や最多外来語化や他の外来語化で特徴的

な4つの訳語は、外来語による使用が優位な項目である。しかし、同様に優位な外来語の選択である単純さと毛織物は、はっきりした、愛らしい、袖口、そして皮と共に無答（大半が訳語のままである）が多くなっている。この無答の多い結果は、被験者に与えた原文において用いられている言葉（分析の対象とした訳語）が、同義である特定の外来語に対応づけることが難しかったことを現している。また、最多外来語

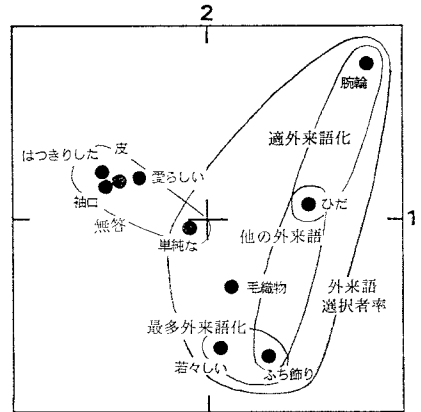


図2 バイプロットによる訳語10項目の分類

語化における具体的な個々の項目は、適外来語化の対象語とした外来語よりも、被験者にとって憶えているものの中でより優位で且つ使用しやすい外来語なのであろう。

表4の6項目については、まず季節用語である春と夏が20%台で適外来語化されており、他は外来語に換えることなく訳語のままであった。色についての緑と茶色は、被験者のほとんどが適外来語化できていたといえる。長い、季節用語よりも適外来語化が多いもののほぼ似た傾向にある。しかし普通は、訳語が短いなどでなかったため、ノーマルを使う者が若干ショートを上回っていた。ただし無答は、6項目の中で最大であった。季節や色や長さなどの同義の外来語に容易に対応づけ可能な用語は、程度の差があるものの外来語化すること自体さほど困難ではないといえよう。

表5は、「外来語→訳語」群の分析（表3）と同じ対象項目について、外来語と訳語の選択者別による4反応様式の得点を示したものである。外来語と訳語のいずれかを選択したかによって、各反応様式における得点傾向に若干の違いが見られる。若々しいは、いずれの語を選択しても全く同じ反応傾向であり、

表5 「訳語→外来語」群の5項目における〈外来語・訳語〉選択者別の反応様式の分類（値は％）

対象項目	選択語(人数)	反 応 様 式			
		適外来語化	最多外来語化	他の外来語化	無 答
若々しい	外来語(39人)	2.6	51.3	5.1	41.0
	訳語(38人)	5.3	42.1	0.0	52.6
単純さ	外来語(42人)	26.2	0.0	2.4	71.4
	訳語(35人)	2.9	0.0	0.0	97.1
毛織物	外来語(65人)	16.9	4.6	7.7	70.8
	訳語(12人)	8.3	0.0	0.0	91.7
飾り	外来語(70人)	12.9	27.1	11.4	48.6
	訳語(7人)	0.0	57.1	0.0	42.9
ひだ	外来語(64人)	50.0	15.6	15.6	18.8
	訳語(13人)	23.0	0.0	38.5	38.5

表4でわかるようにヤング（最多外来語化）が約半数を占めている。単純さは、外来語選択者がかなりの確に外来語を用いている（適外来語化）のに対して、訳語を選んだ被験者のほとんどは無答であった。毛織物についての外来語選択者は無答反応が多いものの、なんらかの外来語を用いて外来語を試みていたといえよう。訳語を選んだ者は、単純さと同様、外来語化を試みていない（無答）者ばかりである。飾りについては、選択者の大半が外来語を選んでおり、その半数以上の者がなんとかして外来語化を行おうとしていたことが推察できる。訳語を選んだ者の半数は、アクセサリー（最多外来語化）を用いていた。最後にひだは、外来語選択者の半数が適外来語化であり、残りの多くの者も外来語化を試みていた。また訳語を選んだ被験者にも、ほぼ同様の傾向が見られることは、ひだという語が他の似通った対象（タック、ダーツなど）と混同されていることを示しているようだ。ここにおいても外来語の指示する内容が、十分に理解されないまま使用されていることが窺われる。

実験 2

目的

語の使用は、その語の意味が理解されていることを前提にしているといえる。そこで第2実験では、訳語との比較から、外来語の意味が十分把握されているのか否かを、意味関係の構造的分析によって検討する。

方法

意味関係の判断実験に用いた外来語と訳語は、外来語とその訳語が各々10項目から成る3グループのリストである。その内の1リストは、実験1で分析の対象語となった外来語と訳語である。これら3種の外来語と訳語のリストは、表6のとおりである。リスト1を除くこれら各リスト内の10項目を各々組合せて45の項目対を作成し、各項目対の意味関係の有無について、9段階の評定を実施した。リスト1のみは、外来語と訳語を合せた20項目を相互に組合せ、190項目対について意味関係判断を求めた。

表6 意味関係判断に用いた外来語と訳語のリスト

リスト 1		リスト 2		リスト 3	
外来語	訳語	外来語	訳語	外来語	訳語
1 ビビッド	はっきりした	アニメ	動 画	オニオン	玉ねぎ
2 フレッシュ	若々しい	エチケット	礼 儀	ガーリック	にんにく
3 キュート	愛らしい	ギャンプル	かけごと	コーン	とうもろこし
4 シンプル	単純な	コンプレックス	劣等感	ジュース	果 汁
5 ウール	毛織物	トラブル	もめごと	ビーフ	牛 肉
6 カフス	袖 口	バーゲン	特価販売	ビール	麦 酒
7 フリル	ふち飾り	フェスティバル	お祭り	ペッパー	こしょう
8 プレスレット	腕 輪	メッセージ	伝 言	ポーク	豚 肉
9 プリーツ	ひ だ	リモコン	遠隔操作	ミルク	牛 乳
10 レザー	皮	リラックス	くつろぐ	ワイン	ぶどう酒

意味関係の強さの評定実験は、表紙と共に、B5 サイズの用紙1枚に評定欄が右隣につけられた15項目対を印刷した小冊子を作成・配付し、集団にて実施した。リスト1の被験者は、大阪府立大学生36名（男16名・女20名）と看護学校の女子学生2群（第1群30名と第2群48名）の3群であった。残るリスト2と3の評定の被験者には大阪府立大学生112名（男88名・女24名）を4群に分け、外来語と訳語それぞれ2リストの計4リストの内から2リストを組合せた4評定群（外来語のみ群、訳語のみ群、対応した項目リストの混合群2群）に割当てた。リスト項目間の意味関係の評定は、関係なしの1から関係ありの9までの9段階によって行った。

データの処理は、評定された結果をリストおよび被験者群別に加算・平均し、意味関係の強さを類似性とみなしたマトリックスを作成した。そして、クラスター分析（群平均法）と非計量多次元尺度法（MDSCAL）によって、このデータを分析した。分析の結果はすべて、MDSCALの2次元解にクラスター分析の結果から任意のレベルのまとまりを描き入れた図によって示されている。なお、MDSCALの解として採用するには、ストレス値などに基づくのが望ましいが、ここではあくまで図を見て理解しやすいことを考えて、2次元解を採用した。

結 果

リスト1の外来語と訳語を合せた20項目についての大学生と2群の看護女子学生の分析結果が、図3（大学生群）、図4（第1看護学生群）、図5（第2看護学生群）である。図の中で、黒丸印は外来語項目、黒三角印は訳語項目であり、対応している外来語と訳語は直線で結んである。20の項目間の意味関係を示す項目の布置とクラスターによって、3つの図を比較してみると、図3では1対を除くすべての外来語—訳語の対が形成されている。図4と図5では7対が認められ、2つの意味関係構造はほぼ同じである。しかし図3に比べると、

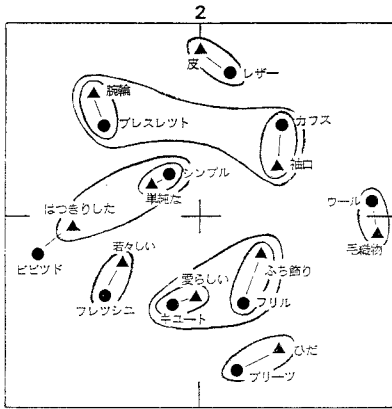


図3 大学生被験者群のリスト1の外来語・訳語20項目の意味関係構造

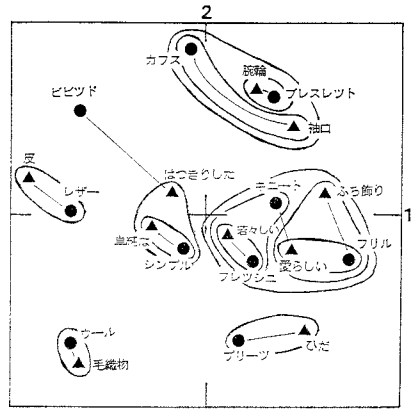


図4 第1看護学生群のリスト1の外来語・訳語20項目の意味関係構造

その構造的な分合の度合いはやや低いといえる。この違いは、図4と図5の被験者がほぼ等質であるのに対して、図3の被験者には男子学生が16人も含まれており、図4や図5の被験者と比べ異質であったのかもしれない。この異質であるかもしれない3つの被験者群(図)で共通する特徴を調べてみると、「ビビッド」と「はつきりした」が外来語と訳語の関係で結びつくクラスターを形成していないことである。また看護学生の2群(図4・図5)だけでは、「キュート」と「愛らしい」、「フリル」と「ふち飾り」が適切な外来語と訳語のクラスターを形成していないことである。

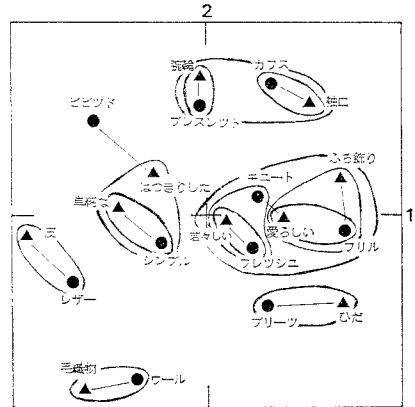


図5 第2看護学生群のリスト1の外来語・訳語20項目の意味関係構造

「はつきりした」が「シンプル」と「単純な」のクラスターに結びつき、

「ビビッド」と外来語—訳語のクラスターを形成しなかったのは、他の項目との意味関係から「はっきりした」が相対的に「ビビッド」の訳語としての確ではないと判断されたのか、あるいは、3群（図3～図5）の被験者たちが「ビビッド」の意味（訳語）が分からなかったことによる結果であったのかもしれない。しかし評定実験だけからでは、この結果がいずれに起因しているかの結論を下すことはできない。ただし図4と図5において、「キュート」と「愛らしい」、「フリル」と「ふち飾り」が的確な外来語と訳語のクラスターを形成していないことについては、2群の被験者たちが外来語の意味（訳語）を十分理解していないことによると推察される。その理由として、図3においては、「キュート」と「愛らしい」、「フリル」と「ふち飾り」がそれぞれ明確にクラスターを形成しているからである。これは、項目間の関係を9段階で評定する際、図3の被験者が各項目についてははっきりとした意味内容を把握しており、これらの外来語とその訳語の意味関係が他の項目との関係よりも、もっとも強い意味関係になりうると判断したことに依存している。

リスト2とリスト3では、同じ大学の学生を被験者として用いたので、以後の結果は等質なデータに基づいているといえる。それ故に、MDSCALとクラスター分析から得られた外来語と訳語それぞれの意味構造を比較することによって、被験者群間での共通性や異質性を発見できるであろう。まずリスト2の4群について分析し、図示したのが図6から図9である。図6と図7は外来語の、そして図8と図9は訳語の結果である。その内の図7と図9は、同じ被験者から得られた結果である。

まず、図6と図7は同じ外来語の意味構造であるが、全体の特徴から意味関係の評価が被験者群間においてかなり異なっている。共通するクラスターは、「トラブル」と「ギャンブル」の結びつきだけである。各被験者群の特徴は、図6で3つ、図7で2つの大きなまとまりにあるようだ。これらの特徴を個々に検討してみると、図6における先の「トラブル+ギャンブル」は、「コンプ

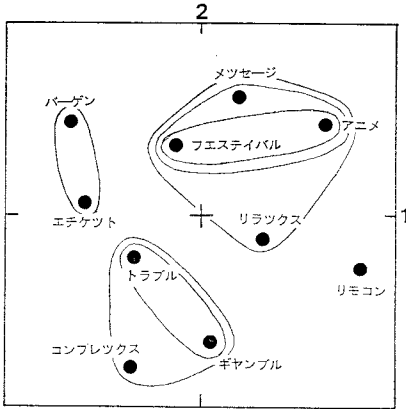


図6 リスト2の外来語10項目の意味関係構造 (1)

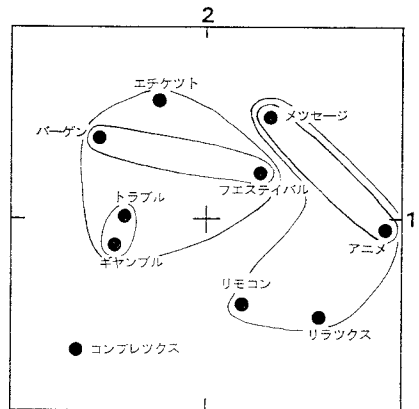


図7 リスト2の外来語10項目の意味関係構造 (2)

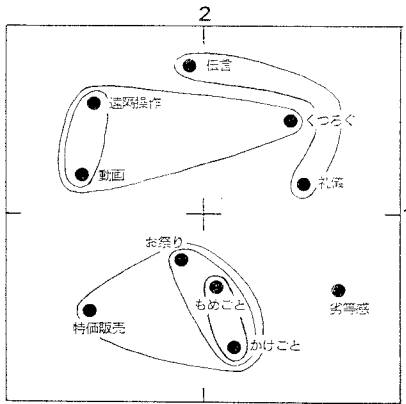


図8 リスト2の訳語10項目の意味関係構造(1)

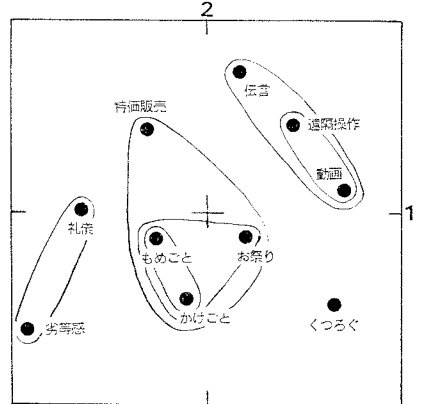


図9 リスト2の訳語10項目の意味関係構造 (2)

レックス」と結合しているのに対して、図7での「トラブル+ギャンブル」は「バーゲン+フェスティバル」と結合している。そしてこの「フェスティバル」が図6では「アニメ」と結合し、「メッセージ」や「リラックス」を含むより大きなクラスターになっている。ところが、図7の「アニメ」と「メッセー

ジ」と「リラックス」は、「リモコン」と共に1つのクラスターを形作っている。図7と図8の被験者群間の違いは、どうやら意味関係判断において、「フェスティバル」の意味をどの様に捉えたかによっているようだ。もしこの様な推察が正しければ、「フェスティバル」はこの外来語の意味空間において核になっていたといえる。

一方、図8と図9では共に3つの大きなグループを形成しているが、その内の「もめごと+かけごと+お祭り+特価販売」のクラスターは全く同一である。さらに共通したクラスターは「遠隔操作」と「動画」の結びつきであり、残る他の項目のあり方は、この「遠隔操作+動画」との結合の仕方に依存しているようである。

このように、訳語リストにおける2つの被験者群間には大きな食違いがなく、本質的には同じ意味関係構造を示している。この訳語における共通した基本的な意味構造は、図9と同じ被験者群によって判断された外来語の意味構造（図7）においても見出すことが出来る。全く同じ結合の仕方ではないが、「もめごと+かけごと+お祭り+特価販売」に対応した外来語のクラスターには、「トラブル+ギャンブル+フェスティバル+バーゲン（+エチケット）」があり、もう1つの「遠隔操作+動画（+伝言）」には、「リモコン+アニメ（+メッセージ（+リラックス）」がある。この意味構造の類似の源泉が、同一被験者群による評価であることは言うまでもない。ただ、個々の意味や他の語との意味関係のあり方について、外来語と訳語が意味表象のレベルにおいて大変似通っていたという事実は、この被験者たちの外来語の意味の獲得や理解が訳語のそれと同程度に達成されていることを示している。ところがこの図7と異なった意味構造の図6からは、外来語の意味の捉え方が被験者群によって異なり、訳語とは違った外来語の意味の多様さ・曖昧さがあることが示されているようである。

次にリスト3の4群について、リスト2と同様に分析し図示したのが図10か

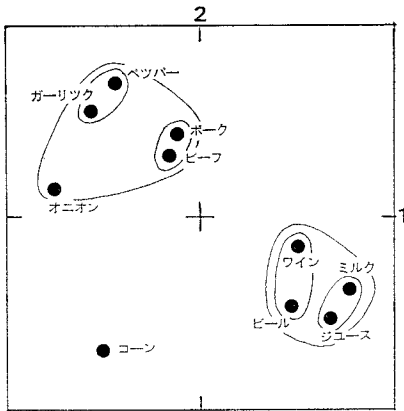


図10 リスト3の外来語10項目の意味関係構造 (1)

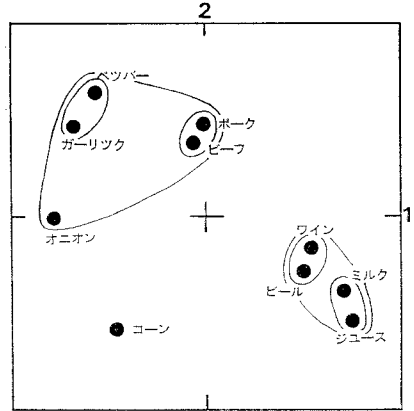


図11 リスト3の外来語10項目の意味関係構造 (2)

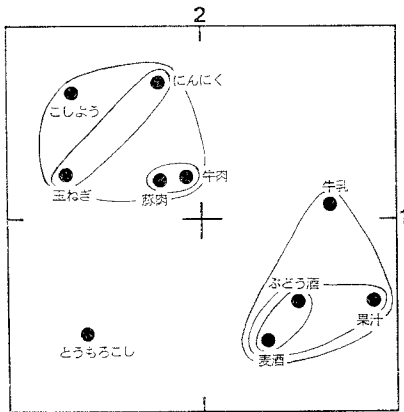


図12 リスト3の訳語10項目の意味関係構造 (1)

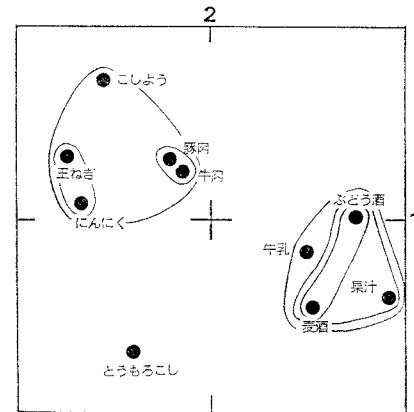


図13 リスト3の訳語10項目の意味関係構造 (2)

ら図13である。図10と図11は外来語の、そして図12と図13は訳語の結果である。やはり図11と図13は、同じ被験者から得られた結果である。

これら4つの図にみられるリスト3の意味関係は、リスト2と異なり、外来語であれ訳語であれ共に大変分かりやすい構造となっており、すべて2つの大

きなクラスターと1つの孤立した項目から成り立っている。図10と図11の外来語においては、個々の項目を結ぶ基礎クラスターやそれらをまとめたクラスター、さらに10項目の2次元空間での布置関係においてまで、全く同じと言える程に似ている。ここでのまとまりは、香辛料と肉と添え物としてのオニオン、酒と飲み物である。コーンはどちらのクラスターからもほぼ等距離に位置し、意味的な繋がりが弱いことを示している。訳語の2つの図についても、ほぼ同じことが言えるが、わずかにクラスターのあり方が違っている。それは、「ぶどう酒+麦酒」のクラスターを中心に、「果汁」さらに「牛乳」と結合していることと、「豚肉+牛肉」は同じであるが、「にんにく」が「こしょう」とでなく「玉ねぎ」とクラスターを形成していることである。

外来語と訳語の意味関係構造がほぼ同じであったということは、リスト3の項目の指示する対象が、すべて具象性の高い物品であり、それも日常の食生活に係わっているものであったが故に、意味の多様さ・曖昧さをもたらす部分がなかったからであろう。ただ、外来語における「ガーリック」と「ペッパー」、訳語における「にんにく」と「玉ねぎ」の結びつき方に、外来語と訳語の意味理解の違いがみられる。それらは各々、外来語においては舶来の調味料や香辛料として、訳語においてはユリ科の多年生葉菜の鱗茎として、意味解釈されているようだ。この違いは、“めし”“ごはん”“ライス”の使い分けとも一脈通じるものがある。

論 議

2つの実験によって、外来語の意味が如何に理解され使われているかを分析してきた。

まず実験1の結果は、実験に使われた材料がファッションに関する文章であり、書き換え課題の被験者が女子短大生だけであったことで、必ずしも一般化が可能なものではなかった。しかし、外来語の使用（選択）傾向に大学生と女

子短大生の間に差がなく、その傾向から外来語を優先して用いる項目、訳語で用いる項目、両者をうまく使い分ける項目とに分けることができた。外来語を訳語に書き換える課題の全体的な結果や代表的な個々の項目分析の結果から分かったことは、外来語で使うことが多いとされた項目でも、訳語に代えられた項目と外来語のままにしておかれた項目とに分れていた。さらに、訳語で用いることの多いとされた項目が外来語で示され、訳語化するように求められると、それらの外来語を省略したり誤訳化する傾向が強かった。これらのことから、被験者は、必ずしも外来語の意味を十分に理解した上で使用しているわけではない、と言えるだろう。また逆に、外来語に書き換える課題の結果から、訳語よりも外来語での使用が優位な項目は、対応した外来語に書き換えられずとも、他の何かの外来語に換えて書かれていた。同じく外来語での使用が優位でありながら書き換えられなかった別の項目は、同義語にあたる特定の外来語を同定するのが困難であったようだ。外来語化のために使われた外来語は、必ずしも訳語と対応関係にあるものではなく、むしろ被験者の記憶の中で利用可能な状態にある外来語であったようだ。この課題においても、外来語の指示対象や指示内容について、被験者は確実な理解の上に立って外来語を用いているとは言えなかった。

実験2では、意味関係構造の比較から、まず実験1で分析の対象としたリスト1の項目は、すべての被験者群で外来語と訳語のクラスターが形成されなかった項目、被験者群によって適切なクラスターの有無に違いのある項目、外来語と訳語の対応づけのできた項目とに分れた。訳語との対応づけができた外来語には、確実に意味内容が理解されていた項目もあったが、中には外来語と訳語が対として提示されることによって初めて関係づけができた項目もあった。適切なクラスターの形成ができなかった外来語は、具象性の低い項目であって、実験1で外来語のまま・誤訳・省略や最多外来語化・無答の多い項目であった。これらのことから、具象的な対象が存在する外来語には、比較的自由自在に訳

語に代えながら使われる外来語と、実験場面などで対にして示されるまで訳語と外来語が同一対象を指示していることに気付かない外来語がある。そして、具象性に乏しい対象や事物・事象の状態を表す外来語は、さほど厳密にその意味を顧みることなく、むしろその外来語から受け取ったイメージやフィーリングに依存して使われているようである。これと同様な傾向は、外来語と訳語それぞれの意味構造の比較において、リスト2やリスト3の結果にも見られた。リスト2のような比較的具象性に乏しい項目の意味判断の結果からは、等質と思われた被験者群間でありながら、外来語の理解を表徴している意味関係構造に違いがみられた。ところが、リスト3のような具象性の強い外来語では、異なる被験者群間でありながら意味構造には全く食違いがみられなかった。これらの事実もまた、外来語の使用と理解が、外来語の指示する対象の具象性のレベルと、個々の外来語の語彙獲得とその結果としての記憶（知識）構造に係わっていることを示している。

新たな外来語の派生には、外国の新しい事物・現象・考え方の導入や新しい語感の導入などが係わっている。また外来語の積極的な使用の原因には、外来語それ自体に情緒的な魅力（見た目や響きなど）を感じたり、知的な伝達道具（政治・経済など専門領域）として利便を図ろうとすることなどがある。ともあれ、日常の言語活動において全く外来語を無視することは、不可能であるといえよう。問題なのは、我々が言語活動において使おうとしている言葉の意味を、どれほど理解しているのかということである。このことは別段外来語に限ることではなく、究極的には漢語や和語をも含んだ日本語の語彙理解の問題でもある。この論文で外来語を素材とし、外来語の使用と理解を問題とした1つの理由は、新聞の投書欄などでの「外来語を追放せよ」「カタカナ英語が多すぎる」「カタカナ外来語の乱用」などなどの、外来語論争が絶えないからである。わからない漢語に接したからと言って、我々は「漢字を追放せよ」「漢語が多すぎる」「漢語の乱用」などと声高に訴えかけることはない。使われてい

る言葉の意味が理解できないことは、外来語であれ漢語であれ同じ筈であるが、外来語は殊更に我々をして、その意味がわからないと意識させ言わしめる言葉なのである。

石野 (1977) は、外来語がどれだけ受け手に理解されているかについて、1973年に行なわれたNHKの調査結果で説明している。この調査は理解度を左右する要因を直接調べていないが、調査の範囲内においてわかっている限りで、学歴差や年齢差の要因が相当利いていることが示されている。個々の外来語について被調査者グループ別に理解の様子を紹介している中で、警備会社社員 (男性) グループは、ハプニングやオリジナルやプライベートのような語の理解度が都市の女性に比べて低いことを取り上げている。そして、彼等がこれらの言葉を全然知らないのではなく、知っているのだが、内容の把握の仕方が曖昧であったことを指摘している。例えば、プライベートの正答と見做される「私的」が65%の正答率であったのに対し、「秘密」が32%もあったこと、またハプニングにしても、正答「偶然的なできごと」の67%に対し、「異常なできごと」が23%であったことなどである。その他、受け手の一般的な理解の傾向としては、生活語とでも言うべき語 (スタミナやバーゲンセールなど) が80%を越す正答率であり、また比較的単純で使用頻度の高いものもがよく理解されていた。逆に、理解度が30%に達しなかったものとしては、高度のインテリ語 (デレゲーションなど) や専門度の高い語 (デフォルメなど) が、50%に達しなかったものには、インテリ語に属するもの (ネック、シリアスなど) が上げられている。そして、石野 (1977) は、理解度と普及度との違いを指摘し、語そのものの普及度は高くても (つまり、よく知られていても)、意味が曖昧に受け取られ、そのために理解度が低くなっていると見られる場合が少なくない、と述べている。また、受け手の多くが、外来語を原語の意味とは無関係に、自分の体験を通していわば自己流に受け取っているのであって、その結果が個々の外来語の理解に見られる個人差、見方によっては外来語の多義性となって現

われるのだとも述べている。この外来語の問題についての石野（1977）の指摘は、国語学や言語学を中心としたものであるが、その中には心理学的な問題も隠されている。それらは、語彙習得（獲得）や語彙指導（福沢，1983）、理解語彙と使用語彙、語の意味（ずれ・不確かさ・曖昧さ）と意味理解（意味を帰納的に覚える能力や意味を類推・帰納する能力などを含む）、さらに知識としての記憶表象や構造との係わり、などなどである。外来語の使用と理解についての2つの実験は、すべての問題に直接繋がっているわけではないが、多くの問題への足掛を提供してくれているといえる。

要約および結論

外来語の使用が、どの程度の意味理解に基づいてなされているのか調べることを目的として、2つの実験を行なった。

実験1では、外来語を主に書かれた文章を漢語や和語が主体の文章に書き改める条件と、逆にわずかの外来語しか含まない文章を出来るだけ外来語による表現に代えた文章にする条件を設け、女子短大生がファッションに関する文章をどのように書き換えたかを単語レベルで分析した。

実験2では、外来語とそれに対応した訳語からなるリストを3つ用意し、大学生の被験者に各リスト内の項目対を9段階（1は関係なし、9は関係あり）で評定させた。評定結果は多次元尺度によって分析された。

2つの実験結果を詳細に検討した結果、次ぎの様な結論を得るに至った。すなわち、外来語は必ずしも十分理解された上で、使われているのではなく、むしろ、外来語の理解は自分なりの経験や感覚に基づいたものであり、またその使用は自分が覚えているものの中から最も使いやすくそれらしいものを選んでいくといえる。外来語の使用と理解の問題は、外来語だけを特別扱いすることなく、日本語全体における語彙習得や語彙指導の問題、さらには語の意味理解や意味表象の問題として考えるべきである。

REFERENCES

- Deese, J. (1965) *The structure of associations in language and thought*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- Fillenbaum, S., & Rapoport, A. (1971) *Structures in the subjective lexicon*. New York: Academic press.
- 深尾 凱子 (1979) 日本に帰化した外国語—カタカナことば—, サイマル出版会.
- 福沢 周亮 (1985) 語彙指導と語彙選定 最新中学校国語科指導法講座 (11) 「漢字・語句・語彙の指導」, 明治図書, Pp 84-104.
- Gabriel, K. R. (1971) The biplot graphical display of matrices with application to principal component analysis. *Biometrika*, 58, 458-467.
- 石野 博史 (1977) 外来語の問題 岩波講座日本語 3 国語国字問題, 岩波書店, Pp. 199-229.
- 桐村 雅彦 (1984) 句項日体制化の構造的分析 大阪府立大学総合科学部 人間科学論集, 16, 93-110.
- 国立国語研究所 (1984) 語彙の研究と教育 (上) 日本語教育指導参考書12, 大蔵省印刷局.
- Miller, G. A. (1967) Psycholinguistic approaches to the study of communication. In D. L. Aim (Ed.), *Journeys in Science*. Albuquerque: The University of New Mexico Press, Pp. 22-73.
- Miller, G. A. (1969) A psychological method to investigate verbal concepts. *Journal of Mathematical Psychology*, 6, 169-191.

Loan word comprehension (1)

Masahiko Kirimura

This paper presents two experiments concerned with comprehension of loan words. In Experiment 1, subjects were asked to transliterate the text, either loan word in native (proper) word or native word in loan word. In Experiment 2, the semantic relations between loan words and native words were investigated. The structural representations were derived from relatedness ratings by using multidimensional scaling (MDS-CAL and Cluster-Analysis). These results indicate that some loan words were used without an accurate comprehension of those meaning.